

東南アジア史学会会報 No. 35

昭和 56 年 10 月

東南アジア史学会第 25 回春季研究大会報告

東南アジア史学会第 25 回春季研究大会は、昭和 56 年 6 月 6 日（土）御車会館、7 日（日）京大会館に於いて開催されました。6 日は自由発表、7 日は「植民地支配と東南アジアの政治的・思想的変容（20 世紀前半を中心として）」をテーマとするシンポジウムとして行われました。各発表の要旨は以下の通りです。

ブディ・ウトモ成立前後の事情

永 積 昭

インドネシアの民族主義運動の団体として最も早い時期に結成されたものの一つに、ジャワ人の文化、教育振興のための団体ブディ・ウトモがある。この団体は本来 20 世紀初頭以後、倫理政策の実施によって次第に各種学校が開設されるにともない、貧しい青少年に奨学金制度を設けようとする医師ワヒディン博士の運動が誘因となり、1908 年 5 月 20 日に誕生したものである。成立当初の幹部は原住民医師養成学校（オランダ語の略称は STOVIA）の学生達であったが、同年 10 月の第 1 回大会以降正式に発足した役員は初期の幹部より年長の原住民政官によって占められ、以後この団体の性格はオランダ植民地政庁の信頼を得るほどに穩健中正なものと化した。1918-22 年ごろには若いメンバーが指導者となり、一時かなり過激な政治活動に走ったこともあるが、概して政府に敵対する態度を取ることは少なく、1935 年に他の数団体と共に大インドネシア党（インドネシア語名 パルタイ・インドネシア・ラヤ、略称パリンドラ）へと解消するまで、インドネシア民族主義団体としては異例の長寿を保った。

さて、1908 年から 18 年までのこの団体の盛衰を知るために、従来私の知る限りブディ・ウトモ自身が発行した『ブディ・ウトモ報告、第 1 年度および第 2 回大会』と『同、第 10 年度 1917-18』の 2 種がほとんど唯一の根本史料であった。しかし 1908 年 5 月から 10 月にかけての指導者交代の事情についてはほとんど語る所がなく、当時の植民地政庁内の公開および秘密文書や、その中に収録されている新聞・雑誌等の関係記事に頼らざるを得なかった。ところが 1973 年 3 月、インドネシア科学院のアブドゥルラフマン・スリヨミハルジョ氏の好意により、今まで誰も言及しなかった『ブディオトモ会議報告書』のコピー入手できたため、この間の事情はかなり明らかになった。

まずこの報告書の使用言語は、ジャワの知識人の間に書き言葉として次第に形を整えつつあった中流マライ語にオランダ語の単語を適宜混入したもので、ブディ・ウトモ自身の文書はもとより、他の多くの団体もこの様な文体を踏襲することになる。原住民医師養成学校の学生達はオランダ語に堪能であり、初期の檄文などは大体オランダ語で書かれていたし、その指導者の 1 人ストモなどは第 1 回大会でもオランダ語で演説した程であったことから考えて、この会議報告書が医学校学生を中心とするバタヴィア支部（医学校所在地の名にちなんでヴェルトフレーデン支部とも言う）ではなく、第 1

回大会の開催地であるジョクジャカルタに1908年8月に設立されたジョクジャ第1支部の作成にかかるものであることが分る。この両支部との間の、敵対とは言えぬまでも相手の動きに神経を尖らせている様子は、この会議報告書からも十分に感じられる。

従来この団体の名称の起源は医学生ストモが医師ワヒディンの大志をたたえた言葉の一節だとされていたが、ストモ伝の作者イマーム・スバルディを殆ど唯一の根拠とするこの説は、会議報告書にも全く現われず、その信憑性はかなり薄らいで来た。

両支部の大会議案作成、大会会場の選定、会議の日程等はこの新史料によって格段に明らかになったが、肝腎の第1回大会そのものについてはこの会議報告書は案外杜撰であって、従来他の新聞・雑誌等の記事から得られた情報の総和を凌ぐどころか、遠くそれに及ばない。これは恐らく巻末の署名年月日からも分る様に、ブディ・ウトモ第1書記ドゥイジョセウオヨがこれを1909年1月30日によく書き終えた有様で、細部については忘れたり、起憶ちがいをしているためではないかと思われる。しかし、たとえばブディ・ウトモの会則案などの様な成文化された事柄については極めて正確で、大いに利用出来る。

『タマン・シスワの成立と展開』

土屋 健治

1. 視点

インドネシア民族主義運動を植民地社会という institution に拮抗しうる counter-institution を創出していく嘗為であるという局面においてとらえ、<植民地主義> VS <民族主義>、<近代> VS <伝統>、<西欧> VS <アジア>、<秩序> VS <対抗秩序> 等の基軸において、この嘗為の特質を解明する。

2. 対象

このような counter-institution を創出するためのもっとも自覺的な運動としてタマン・シスワ Taman Siswa（「学童の園」）という民族主義的教育運動を考察の対象とする。

3. 考察

タマン・シスワ学校が成立し、それがタマン・シスワ運動 Pergerakan Taman Siswa として展開していく時代の植民地社会は、タマン・シスワによって次のように対象化された。すなわち、それは、植民地官僚制 Beambtenstaat というシステム、オランダ的実務性 zakelijkheid というスタイル、オランダ的秩序と安寧 orde en rust というイデオロギーによって、「富の流出」を実現する（資源・土地・労働力の調達を通じて） institution である。

これに対して、タマン・シスワは自らの嘗為を次のように意味づけていた。すなわち、(1)禁欲主義 (pertapaan) と(2)西欧近代の超克と(3)指導性民主主義 (democratie en wijsheid / leiderschap / Kebidjaksanaan) によって、「共に分ち共に感應する」“ sama rata sama rasa ”と民族主義的秩序と安寧 “ tata tentrem / tertib damai ” の実現を保証しうる「共同体」 Keluarga Besar Taman Siswa を、 institution に拮抗しうる counter-institution として創出していく嘗みである。

(1)禁欲主義

禁欲主義の要諦は、民族主義の時代の正統性シンボルである<人民> Rakjat に献身すること、及び、

回大会の開催地であるジョクジャカルタに1908年8月に設立されたジョクジャ第1支部の作成にかかるものであることが分る。この両支部との間の、敵対とは言えぬまでも相手の動きに神経を尖らせている様子は、この会議報告書からも十分に感じられる。

従来この団体の名称の起源は医学生ストモが医師ワヒディンの大志をたたえた言葉の一節だとされていたが、ストモ伝の作者イマーム・スバルディを殆ど唯一の根拠とするこの説は、会議報告書にも全く現われず、その信憑性はかなり薄らいで来た。

両支部の大会議案作成、大会会場の選定、会議の日程等はこの新史料によって格段に明らかになったが、肝腎の第1回大会そのものについてはこの会議報告書は案外杜撰であって、従来他の新聞・雑誌等の記事から得られた情報の総和を凌ぐどころか、遠くそれに及ばない。これは恐らく巻末の署名年月日からも分る様に、ブディ・ウトモ第1書記ドゥイジョセウオヨがこれを1909年1月30日によく書き終えた有様で、細部については忘れたり、起憶ちがいをしているためではないかと思われる。しかし、たとえばブディ・ウトモの会則案などの様な成文化された事柄については極めて正確で、大いに利用出来る。

『タマン・シスワの成立と展開』

土屋 健治

1. 視点

インドネシア民族主義運動を植民地社会という institution に拮抗しうる counter-institution を創出していく嘗為であるという局面においてとらえ、<植民地主義> VS <民族主義>、<近代> VS <伝統>、<西欧> VS <アジア>、<秩序> VS <対抗秩序> 等の基軸において、この嘗為の特質を解明する。

2. 対象

このような counter-institution を創出するためのもっとも自覺的な運動としてタマン・シスワ Taman Siswa（「学童の園」）という民族主義的教育運動を考察の対象とする。

3. 考察

タマン・シスワ学校が成立し、それがタマン・シスワ運動 Pergerakan Taman Siswa として展開していく時代の植民地社会は、タマン・シスワによって次のように対象化された。すなわち、それは、植民地官僚制 Beambtenstaat というシステム、オランダ的実務性 zakelijkheid というスタイル、オランダ的秩序と安寧 orde en rust というイデオロギーによって、「富の流出」を実現する（資源・土地・労働力の調達を通じて） institution である。

これに対して、タマン・シスワは自らの嘗為を次のように意味づけていた。すなわち、(1)禁欲主義 (pertapaan) と(2)西欧近代の超克と(3)指導性民主主義 (democratie en wijsheid / leiderschap / Kebidjaksanaan) によって、「共に分ち共に感應する」“ sama rata sama rasa ”と民族主義的秩序と安寧 “ tata tentrem / tertib damai ” の実現を保証しうる「共同体」 Keluarga Besar Taman Siswa を、 institution に拮抗しうる counter-institution として創出していく嘗みである。

(1)禁欲主義

禁欲主義の要諦は、民族主義の時代の正統性シンボルである<人民> Rakjat に献身すること、及び、

この禁欲的献身をジャワの伝統的な教育機関である寄宿塾における禁欲的文化（修業と修身）の再生に重ね合わせることである。こうして、タマン・シスワ学校の教師は寄宿塾（pondok, asrama, pesantrenなど）の主宰者（pandita）であると了解され、また、教師の住居＝教育の館＝寄宿塾であり、タマン・シスワのネットワークとはこのような寄宿塾の全国的ネットワークであると了解されていた。

また、このような禁欲主義は植民地社会の唯物主義 materialisme（その風俗としての享楽の為の facility； speelhuis vs. rumah perguruan）及び欲望自然主義（sewenang-wenang と hormat 制との結合）に対峙する倫理であるとされた。

(2)西欧近代の超克

タマン・シスワは、ジャワの伝統的な寄宿塾を再生することは、西欧近代の最先端にある教育思想に適うことである、と認識していた。この認識は、西欧における西欧近代への批判と反省の中から、モンテッソリやフローベル、なかんずく、タゴールのような、子供の「内在する智恵」wijshheid の開示と涵養を重視する教育観・人間観、あるいはまた、西欧近代の人間像の危機を克服する鍵をインドの文化に求めようとする教育観・人間観が、生み出された、という判断に基いていた。この認識はジャワの（ことに王朝貴族）文化にたたえられている了解のわく組に対する再認識とひとつになって、寄宿塾のネットワークを創出するというタマン・シスワの目標に、現代的な意義と普遍的な意義を与えることになった。

(3)指導性民主主義

タマン・シスワは、ジャワの伝統的な秩序の理念型（「黄金の時代」“zaman mas”）を再生することが、民族主義の時代の時代精神（「人民主義」“kerakjatan”）を実現することであると認識していた。

タマン・シスワの了解では、「智恵」を開示し涵養する場合の「智恵」とはジャワ語の wicaksana（インドネシア語の kebidjaksanaan）にはかならず、この wicaksana こそ、ジャワの「黄金の時代」にあっては「宇宙の主宰者」Sang Hyang Tunggal の意思を得し、「君主一如」Manunggal kawulo-Gusti を実現する資質であり；また、民族主義の時代にあってはこの時代の「宇宙の主宰者」であるところの＜人民＞“Rakjat”的意思を得し、この wicaksana に導かれてタマン・シスワの内部では、“sama rata sama rasa”と“tata tentrem”が実現する、すなわち、タマン・シスワは、帰一の原理の機能する聖なる大家族“Keluarga Besar Jang Sutji”であるとされた。

別言すれば、タマン・シスワにおいては、寄宿塾のネットワークをタマン・シスワ大家族（Bepak / Ibu と anak buah）として機能せしめることにより、Kebidjaksanaan の制度化が行われたのである。そこでは、デワントロを頂点とする指導者の連鎖が形成される一方、デワントロによるひんぱんな支部訪問が行われ、機関誌 Pusara（『紐帶』）が教材としての機能を果たしていた。教師の自己調達システムも機能していた。

タマン・シスワの基底をつらぬいていたのは、ジャワの伝統文化としての寄宿塾（“tata tentrem”と“sama rasd sama rata”）を再生することが、近代（rakjat, Indonesia, kerakjstan を含む modern）を包摂しうるという理念と、この理念を、植民地社会という空間に拮抗する新たな共同体（タマン・シスワ聖家族）の創出という形で実現しようとする自覚的な営為であったということができる。

フィリピン民族主義の創出とプロパガンダ運動

池 端 雪 浦

<フィリピン民族主義>をいま仮りに<フィリピン民族としての自覚と共同性の形成>・<植民地支配の廃絶>という二つの中心課題をめぐって展開される運動の動態的プロセスと規定するならば、そのような意味での<フィリピン民族主義>の萌芽は19世紀中葉に遡り、爾来それは、フィリピンの政治と思想の世界で中心的な位置を占めてきたと言える。

ところで、このフィリピン民族主義には、思考様式という観点からみて二つの潮流があるというが、私の目下の仮説である。第一の潮流は、スペインの植民地支配を受ける以前の土着文化の上にコンテキスト化され、そうすることによって住民の信仰世界を統合し、体系化したところのフィリピンカソリシズムを意味の枠組（＝思考母胎）とする民族主義運動。二つは、近代西欧社会で形成された人権思想や人民主権の概念に基くさまざまな政治思想を意味の枠組とする民族主義運動である。

本報告でとり挙げるプロパガンダ運動は、1880年代初頭からフィリピン革命前夜にかけて、植民本国スペインとフィリピン（マニラ及びその近郊）の両地を舞台にして、フィリピン人有産知識階級が展開した改革運動で、上述したフィリピン民族主義の第二の潮流の源流をなすと考えられる運動である。この報告では、フィリピン民族主義のもう一つの潮流を一方に見据えつつ、それとの対比において、この運動の特徴を浮彫りにしたい。主要な論点はつぎの点にある。(1) この運動の担い手は、主として、スペイン式の中・高等教育を受けた有産知識階級（プリンシパリーア階級と言い換えてよい）であったこと。(2) かれらはフィリピン人の置かれている現実、すなわち、植民地支配体制をスペイン伝来の自由主義思想の枠組で対象化し、了解したこと。(3) 従ってかれらは、現実からの救済を自由主義の論理による制度の改革として提起したこと。（この制度改革要求は、①修道会の專制支配には直接言及しない微温的な改革要求の段階から、②修道会の專制支配に批判の鋒先を集中した段階、③植民地支配を修道会と世俗の権力の連合した一つの体制として構造的に把握し、これに対する全面的な批判を展開した段階、の三段階を経過した。）(4) 運動の主張は主としてスペイン語で表現され、主張の受容者としてはスペイン人とフィリピン人の双方が想定された。換言すれば、双方に了解可能な言葉と思考様式が存在すると暗黙のうちに前提されていた。(5) この運動の中で、デル＝ピラール（M. H. del Pilar）らとは異なる一派を形成したリサール（José Rizal）の変革思想には、④制度よりも精神の変革を重視する、⑤民族の独立をフィリピン人自身の過去に対する「贖い」として捉え、その最終的な達成は神の救世の御手に委ねられるとする、⑥民族意識の基底にdamayの感情を置く、などの点で、上述のフィリピン カソリシズムの思考様式に近いものが見られること。

ベトナム近代の曙 — ファン・チュ・チンをめぐって

白 石 昌 也

はじめに

- I. 維進運動の形態
- II. 指導者たち
- III. 植民地政府との関係

フィリピン民族主義の創出とプロパガンダ運動

池 端 雪 浦

<フィリピン民族主義>をいま仮りに<フィリピン民族としての自覚と共同性の形成>・<植民地支配の廃絶>という二つの中心課題をめぐって展開される運動の動態的プロセスと規定するならば、そのような意味での<フィリピン民族主義>の萌芽は19世紀中葉に遡り、爾来それは、フィリピンの政治と思想の世界で中心的な位置を占めてきたと言える。

ところで、このフィリピン民族主義には、思考様式という観点からみて二つの潮流があるというが、私の目下の仮説である。第一の潮流は、スペインの植民地支配を受ける以前の土着文化の上にコンテキスト化され、そうすることによって住民の信仰世界を統合し、体系化したところのフィリピンカソリシズムを意味の枠組（＝思考母胎）とする民族主義運動。二つは、近代西欧社会で形成された人権思想や人民主権の概念に基くさまざまな政治思想を意味の枠組とする民族主義運動である。

本報告でとり挙げるプロパガンダ運動は、1880年代初頭からフィリピン革命前夜にかけて、植民本国スペインとフィリピン（マニラ及びその近郊）の両地を舞台にして、フィリピン人有産知識階級が展開した改革運動で、上述したフィリピン民族主義の第二の潮流の源流をなすと考えられる運動である。この報告では、フィリピン民族主義のもう一つの潮流を一方に見据えつつ、それとの対比において、この運動の特徴を浮彫りにしたい。主要な論点はつぎの点にある。(1) この運動の担い手は、主として、スペイン式の中・高等教育を受けた有産知識階級（プリンシパリーア階級と言い換えてよい）であったこと。(2) かれらはフィリピン人の置かれている現実、すなわち、植民地支配体制をスペイン伝来の自由主義思想の枠組で対象化し、了解したこと。(3) 従ってかれらは、現実からの救済を自由主義の論理による制度の改革として提起したこと。（この制度改革要求は、①修道会の專制支配には直接言及しない微温的な改革要求の段階から、②修道会の專制支配に批判の鋒先を集中した段階、③植民地支配を修道会と世俗の権力の連合した一つの体制として構造的に把握し、これに対する全面的な批判を展開した段階、の三段階を経過した。）(4) 運動の主張は主としてスペイン語で表現され、主張の受容者としてはスペイン人とフィリピン人の双方が想定された。換言すれば、双方に了解可能な言葉と思考様式が存在すると暗黙のうちに前提されていた。(5) この運動の中で、デル＝ピラール（M. H. del Pilar）らとは異なる一派を形成したリサール（José Rizal）の変革思想には、④制度よりも精神の変革を重視する、⑤民族の独立をフィリピン人自身の過去に対する「贖い」として捉え、その最終的な達成は神の救世の御手に委ねられるとする、⑥民族意識の基底にdamayの感情を置く、などの点で、上述のフィリピン カソリシズムの思考様式に近いものが見られること。

ベトナム近代の曙 — ファン・チュ・チンをめぐって

白 石 昌 也

はじめに

- I. 維進運動の形態
- II. 指導者たち
- III. 植民地政府との関係

おわりに

本発表は、ファン・チュ・チンを含めて、20世紀初頭ベトナムの、所謂「維新」運動について概説を試みることを企図したものであったが、やや総花的なものに傾いたきらいがある。発表者の強調点は、しかしながら、次の諸点におかれていた。

(1) 北、中、南折における運動の地域的相違。特に従来北折における東京義塾運動にのみ焦点があつたのがちであったのに対して、中折での運動の重要性を強調。また北、南折での運動が都市部を主体として展開されたのに対して、中折は農村部。活動に参加した知識人に関しては、南折が富裕な地主階層、中折が在村知識人層、北折が商人化した文紳層や北折官人層、および新学知識人より成っていたなど、それぞれにおいて様相が異なることを指摘した。しかしそれが事実関係の指摘にのみとどまり、その背景としてある北、中、南各折の地域的な相違（政治、文化、社会、経済的な）にまで分析を深めることは、なされていない。

(2) 運動に参加した知識人たちの契機として、ナショナリスト的な政治的覚醒と、商品経済の影響→萌芽的な「資本家的経営精神」の出現という、ふたつの要素を指摘したが、特に第2の要素について、発表者の分析が煮つまっていたとは言い難い。

(3) 運動と植民地政府との関係は、従来の研究ではほとんど顧みられてこなかった分野であるが、発表時間の制約上、当日の発表では充分に議論を展開し得なかった。この問題に関しては、フランス当局者の各地の「維新運動」の活動に対する好意的な対応、ファン・チュ・チンと一部フランス人と親交と言った具体的な側面と共に、当時の総督P.ボーの政策や、フランス植民地政策の一般的な傾向（特に同化主義 v.s. 協同主義）といった局面での検討が、今後とも課題として残る。またファン・チュ・チンたちがフランスによる植民地支配そのものをどのように認識していたのかも、重要な問題である（この点は発表後の総括討論の場で問題となった）。私自身の考えとしては、やはりファン・チュ・チンは、植民地支配をアприオリに「不条理」「不道徳」とみなしていたのではなくして、むしろフランス文明の持つ「近代」性とか「文明」性と言ったものに期待を抱いていたように思われる。そこに彼が後世先駆的な民族主義者として評価されると同時に、他方では「仏越提携主義」の先覚者として親仏派ベトナム知識人によって持ち上げられる要因ともなったのである。

(4) 維新運動の参加者と阮朝官人層との対立に関しても発表者は言及したが、時間の制約上充分に意を尽したとは言い難い。維新運動をめぐって、運動参加者、阮期官人層、フランス当局者の三者の絡み合いを、より立体的に捉えることが今後の課題となろう。

総じて、今回のシンポジウムにおいては、ヨーロッパの植民地支配とその持ちこんだ「文明」「近代」（それが例え擬似的なもの、竹内好の言を借りれば「エセ文明」、であったにせよ）と言ったものに対して、東南アジアの知識人たちがどのような認識、評価、反応を示したかが共通のテーマとなっていたようと思われる。そういう問題に関しては、それぞれの知識人の資質や背景、時代的相違、それぞれのおかれていた植民地社会の相違といったものを踏まえた上で、比較と総合的な検討が必要であったと思われるが、時間的な都合もあって総括討論の場で充分に展開されたとは言い難いとの印象を持つ。また私自身としては、上に述べた通り私の発表が総花的なものとなってしまい、他の発表者の提示した問題とうまく噛み合わなかった部分があり、大いに反省していることも事実である。

東南アジア史学会第26回秋季研究大会について

東南アジア史学会第26回秋季研究大会は、12月12日（土）東京本郷学士会館分館、13日（日）神田学士会館に於いて開催されることになりました。自由発表のほかに「東南アジアの歴史と文学」というテーマでのシンポジウムを予定しており、大会委員を中心に準備を進めております。現在の所、「東南アジアの歴史と文学」シンポジウムにおいては、村井信幸「ナシ族の文学」（コメント：白鳥芳郎）、吉川敬子「タイの王朝四代記」（コメント：松山納・市川健二郎）、中原道子「スジャラ・ムラユ、文学と歴史の間」（コメント：生田滋）各氏の発表を予定しております。自由発表については、未定ですので、報告を希望される会員は10月25日までに東大文学部永積研究室にお知らせ下さい。

なお特別講演として、三上次男氏の「東南アジア発見の貿易中国陶磁について」を予定しております。

会長選挙に関するお知らせ

現会長の任期2年が、今秋の総会当日で満期となりますので、「東南アジア史学会役員選出規則」によって選挙を実施します。この選出規則では、「選挙権及び被選挙権を有する者は、昭和55年度までの会費を納めた会員とする」、となっておりますので（会費は55年度以前一般2000円、学生1500円、56年度一般3000円、学生2500円です）会費未納の方は同封致します納入状況のお知らせを御確認の上、10月末日までに御送金下さる様お願いします。10月末でこれを締切って選挙人名簿を作成し、投票用紙等と共にお送り致します。

投票は11月末締切りで、会長候補者選考委員7名を選挙していただくものです。この7名の委員会が会長候補者を選考し、最終的には12月13日の総会で会長を決定いたします。なお、これらの選挙事務を担当する選挙管理委員5名を「役員選出規則」にもとづいて、次の諸氏にお願いすることになりましたので、お知らせします。

赤木 攻 土屋健治 深見純生 桃木至朗 渡辺佳成

昭和 56 年 10 月 発行

発行者 東南アジア史学会（藤原利一郎）

住 所 〒606 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部東洋史研究室

電 話 (075) 751-2111 内線 2790

振 替 京都 41772 東南アジア史学会